

ずいそう

五輪出場命中

中山 由起枝



今から20年前の高校3年の夏。

「クレ射撃をやってみないか？クレ射撃で五輪を目指してはみないか？」と考えもしない競技のオファーがかかった。1996年アトランタ五輪、クレ射撃の試合を現地で観た、当時日立情報システムズのライフル射撃部監督の白木氏は、素質があればクレ射撃競技は短期間で五輪を目指せると考え、日立グループのソフトボール部やハンドボール部などの各実業団監督に調査協力を依頼した。また同社は既にライフル射撃部を抱えているため、私が所属することになる日立建機にこの話を持ちかけた。

「シンボルスポートとして日立建機でクレ射撃部を立ち上げてみてはどうか」

団体競技を創設するとなると設備費、管理費など莫大な費用がかかる。しかし、個人競技に投資するのであればやっていけるだろう。また、国内においては日立建機のユーザーにクレ射撃競技をやっている方が多い。先見の明を向け誰もやったことのない領域に会社側も思い切って飛び込もうとしていた。

日立建機は当時、イタリアに合弁会社のFiat-Hitachiがあり、現地駐在員と本社とのやりとりでイタリアの射撃協会にアタック。クレ射撃はイタリアが先進国であり、銃、装弾メーカーが盛んであるということもあり、イタリアのジュニア専属コーチの紹介を受け、まっさらな初心者でも1年間イタリアに武者修行に出す計画を同社は進める。スカウトする有力候補者として重点に置いた条件は、1997年4月に入社できる高校

三年生であること。動体視力、身体能力、瞬発力、忍耐力などが高校生の中でもトップクラスであること。

調査の結果たどりついたのが私であった。ソフトボールの強豪校である埼玉栄高校に進学し、小学生時代から9年間にわたり団体競技をしてきた私にとってははじめての個人競技、そして競技自体全く無知の世界だっただけに初めは何の話をしているのか理解できなかったが、日立建機は熱心に高校に何度も足を運び、アトランタ五輪のクレ射撃の試合のビデオを繰り返し見せられた記憶がある。競技の説明、会社の方針の話も受けた。

全く興味のなかった私だったが、徐々に会社の熱意に惹かれ、個人競技への興味も増していった。そして今は亡き高校時代のソフトボール部の顧問であった監督から決定的な言葉を受ける。「決して甘い世界ではないだろうが、競技は違っても競技者として五輪を目指すことは中山ならできだろう」

この言葉で私の人生は大きく変わった。

私の競技人生20年の中で4度も五輪の舞台に立ち、たくさんの方々に支えられ中山由起枝が形成されていった。この経験を味わうことが出来たのは巡り合わせなのか、人生の選択に立たされたときにさまざまな奇跡が起こったのかもしれない。

チャンスを引き込みキャッチするのは自分なのかもしれないが、私の場合、出会うべき時に素晴らしい人との出会いがあり、信頼する方からの助言や環境などが恵まれていたように思う。必要な方向へ引きつけら



リオ五輪の出場枠を獲得したアゼルバイジャンワールドカップ(2015年、優勝)



リオ五輪では最後まで諦めず気持ちを奮い立たせた。

れるかのように進むことが出来たからこそ4度も五輪の地に立てたのだと確信している。もちろん今まで幾度も挫折や苦難もあったが、そこを脱出するにもやはり私だけの力ではなく家族や会社、周囲の支えが私を救ってくれた。

クレ射撃を始めて1年11ヶ月でシドニー五輪の出場枠を獲得した。会社としては、当初次の次に開催される2004年のアテネ五輪出場を見据えての計画だった。競技歴3年弱で出場することとなったはじめての五輪は、競技が楽しくてしかたなかった状態から一変、私は大きな不安とどこまで突き進むのかという恐怖に襲われた。案の定、予選落ちの13位という結果に終わり、自身初めての挫折だった。

2度目の北京五輪では母となり愛娘と挑んだ。偶然ではなく、自分のあるべき姿で頭角をしっかりと現し、戻ってきた舞台だった。自信に満ち溢れ、母としても競技者としても勇姿を見せたいと思って挑んだ。結果はメダルに一番近づいた4位入賞。大健闘ではあったが大きな悔しさが残った大会でもあった。この北京五輪4位という結果で経験した後のエピソードは、一言で言うと「人間不信」。「なぜ最後の1発を外したのか」、「メダルを自ら手放した」など、かけられる言葉のひと言ひと言に追い込まれていった。そこからまた立ち上がり前へ進むことが出来たのはやはり娘の存在だった。本格的に二人三脚で足並みをそろえスタートを切った。北京五輪当時6歳だった娘はロンドン五輪では10歳を迎えていた。必死で五輪の出場枠を獲得したものの結果は15位で惨敗に終わった。応援団長を買って出た娘の悔し涙とひと言では言い表すことの出来ない溢れる思いにもう一度挑戦したい、五輪をめざしたいという気持ちが自分に沸きおこった。私は娘が1歳の時に離婚を経験し、シングルマザーとなり競技

に復帰した。競技を続行するには周囲の助けや理解がこれまで以上に必要となる。その自分の夢を共有してくれる「チーム中山」として最終目標をリオデジャネイロ五輪挑戦と掲げた。

2015年アゼルバイジャンで行われたワールドカップ大会で、自己最高得点をマークし予選を突破。そのまま準決勝、決勝ともにトップの順位を維持して金メダルを獲得。リオ行きの切符を手に入れた。確実に進化した自分が存在し、空間の枠を超えた試合をしていたように思う。2016年自身4度目の五輪挑戦。日本国内で、夏季五輪に4度以上出場した選手は約十数人で、そのうちの一人が私だと聞いた。いずれにせよここまでの過程は尋常ではない競技生活を送ってきた。母親と競技者という二足の草鞋は、私にとって精神的にも肉体的にも強くしてくれたが、リオ五輪では実力不足でまたしても惨敗。4年に1度の五輪の舞台でどうやったら勝てるのか、メダルが遠い、限界なのか、私には無理なのかと何度も自問した。もちろん今もしている。

しかし、2020年の東京五輪の舞台にはまた私が立っている。そんな気がしてならない。そして、ロールモデルとしてオリンピックらしい姿を若い選手たちに見せながら引っ張っていく私がその後にもいる。答えは今すぐ出なくとも、なりたい自分がイメージされていればそこにたどりつくよう私は動き始めるはずだ。

一か八かの大勝負を持ちかけた当時日立情報システムズの白木氏、それを受けた日立建機の片桐氏、中山氏陣営は、日立建機クレ射撃部創設を成功と思ってくれているだろうか。東京五輪まではその答えは封印しておきたい。

——なかやま ゆきえ 日立建機(株) クレー射撃部
(シドニー、北京、ロンドン、リオデジャネイロ五輪クレ射撃日本代表)——